



慶應義塾大学ビジネス・スクール

セント・ポール製薬株式会社

5

セント・ポール製薬株式会社は、ワシントン郊外の小高い丘の上にあった。本社屋は明るい近代的な2階建てのビルディングで、別棟の工場がそれに隣接していた。慶應義塾大学ビジネス・スクールのケース・ライターは、技術リエゾン・マネジャーの小林茂氏にインタビューするため10にセント・ポール製薬を訪問した。

セント・ポール製薬株式会社は、日本の大手化学メーカーである大倉化成工業株式会社とアメリカの製薬会社の合弁会社であった。小林氏は大倉化成工業の医薬品事業部からの海外出向として、セント・ポール製薬に勤務していた。ケース・ライターのインタビューの目的は、小林氏自身の仕事やキャリアについての考え方を聞くことであった。

セント・ポール製薬のトップ・マネジメントは、8名がアメリカ人で、2名の日本人が大倉化成工業から副社長として入っていた。この2名の外に、本社スタッフに日本人が4名おり、このうちの1人が小林氏であった。工場の従業員はすべてアメリカ人であった。

セント・ポール製薬の売上高は、ここ数年は年率約30%で伸びてきており、インタビューの前年は1億3,000万ドルであった。親会社の大倉化成工業は、セント・ポール製薬以外にもヨーロッパやアジアに多くの子会社や合弁会社を持っており、セント・ポール製薬自身も、ヨーロッパにいくつかの子会社や合弁会社を持っていた。

ケース・ライターが訪問したのは金曜日の午後であった。小林氏は日本からの大学医学部教授に付き添ってユタ大学病院へ案内するための2泊3日の出張を終えてちょうど戻って来たところであった。ケース・ライターは、はじめに小林氏の案内で建物の概要を見て回った。その後、応接室で小林氏と懇談し、間を置きながら日本人を含む数名の本社スタッフと挨拶をした。応接室には大倉化成工業の社長の写真も掲げてあった。

小林氏は現在36歳であった。2年前に妻と子供1人と共にセント・ポール製薬に出向して来

15

20

25

30

ケース中の固有名称はすべて偽装されている。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright© 高木晴夫 (1993年11月改訂)